

令和 5 年 6 月 13 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K04131

研究課題名（和文）山村社会にみる森林資源を介した人的関係網の生成過程 流入者と小集落の相互作用から

研究課題名（英文）The Formation Process of a Network of Human Relations through Forest Resources in Mountainous Areas: Social Interaction between Migrant Workers with Small Rural Communities

研究代表者

福田 恵（Fukuda, Satoshi）

広島大学・人間社会科学研究科（総）・准教授

研究者番号：50454468

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本の山村社会に張り巡らされた森林資源を介した人的関係網の生成プロセスについて調査研究を行い、以下の点を明らかにした。第一に、兵庫県北部地方（但馬）に全国各地から来訪した林業者の移動ルートと広域的な社会関係およびそれを支えた小集落の社会的役割を特定した。第二に、その背景にあった移動をめぐる排出地域と受入地域の全国的な俯瞰図を得た。第三に、定住と移動を組み込んだモノグラフおよび持続的な山村像の可能性を示唆した。

以上の調査結果について、学会発表9件、論文執筆7件、刊行物の発刊2件の研究成果を公表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義としては、まず画一的かつ閉鎖的な山村像ではなく、移動や広域性を内蔵したダイナミックな山村社会像を提起した点、また、森林資源を介した山村社会の定住と移動の問題を、社会学、民俗学、経済学、人類学など学際領域のテーマとして再定位した点が挙げられる。また本研究の社会的意義としては、現代社会のなかでその存在が危ぶまれる小集落に焦点を当て、その歴史的かつ社会的な役割を見直した点が挙げられる。

研究成果の概要（英文）： In this study, we conducted a survey and research on the formation process of a network of human relations through forest resources within the mountain village society of Japan, and clarified the following points.

First, we demonstrated the social relationships and migration routes of forestry workers who came to the northern region of Hyogo Prefecture (Tajima) from mountain villages throughout Japan, as well as the social roles of small rural communities that supported them. Second, we obtained a nationwide bird's-eye view of the regions that emit and receive forestry migrant workers. Third, through a monograph on settlement and migration, we suggested portraying mountain villages in a sustainable light. We presented nine conference presentations, wrote seven papers, and published two publications based on the aforementioned findings.

研究分野：農村社会学

キーワード：山村社会 小集落 森林資源 林業 出稼ぎ 農村社会学 ネットワーク

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、以下三つの研究潮流を学術的背景としている。

第一に、「ローカル・コミュニティ」「むら」「集落」の意義を問い直す諸研究である。近代化やグローバル化がもたらす社会矛盾に直面する現代社会の中で、安心と安全の拠点としての小さなコミュニティの見直し(広井良典他編,2010,『コミュニティ』勁草書房)農業や景観、生活を支えるむら集落の再考(日本村落研究学会編,2007,『むらの資源を研究する』農文協)が図られている。本研究は、こうした学問的経緯に立脚しつつ、小集落が保持した社会的役割に焦点を当てる。

第二に、「森林」ないしは「山」の利用から、地域社会、日本社会の特質解明を図る諸研究である。戦前戦後を通して、日本の農山村の共同性の契機をめぐって入会林野に注目する諸研究は社会科学全般(農業史では古島敏雄、法社会学では中田薫、戒能通孝、川島武宜、社会学では福武直)にみられた。近年では、山の共同によってもたらされた土地管理や環境管理機能、あるいは生活上の意義に着目するコモンズ研究が新たな領域を切り開いている。本研究は、一連の村落・地域レベルの研究蓄積を踏まえた上で、移動者および村外者が森林利用に深く関与した点に力点を置く。

第三に、従来の地域研究、村落研究の方法論的限界を超えようとする知的潮流と軌を一にしている。熊谷苑子によれば、従来の地域、村落研究は、定住、生産力主義、地域的完結性という作業仮説を堅持するため、移動(個人)持続性、俯瞰的視野構造といった発想が必要だと説く(「二十一世紀村落研究の視点」『年報村落社会研究』第39集、農山漁村文化協会、35-48頁)。近年では、そうした新たな視点から、これまでにないモノグラフが編まれている。広島漁村からフィリピンへの移民を追った武田尚子の『マニラへ渡った瀬戸内漁民』(御茶の水書房、2002)越後の毒消し売りの女性たちと母村との繋がりを描いた佐藤康行の『毒消し売りの社会史』(日本経済評論社、2002)などである。これらの研究は、コミュニティ構成員の外部への移動に着目している。本研究は、そうした近年の研究を踏まえながら、コミュニティからの移動ではなく、コミュニティへの移動に着目することにより、定住者と流入者の関係(網)を焦点化する。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、日本の山村社会に張り巡らされた森林資源を介した人的関係網の生成プロセスを具体的に解明し、その学問的意義を明示する点にある。実証的には、兵庫県北部但馬地方に全国各地から来訪した林業流入者の移動ルートと広域的な社会関係およびそれを支えた小集落の役割を明らかにする。その上で、地方別(特に中央日本と西日本)の諸事例と照合し、但馬地方の人的関係網の特質を山村研究の中に位置づける。

## 3. 研究の方法

研究目的を達成するため、次のような調査・研究体制を確保する。調査対象地域については、これまでの情報をもとに、「定点調査」(兵庫県但馬地域内の集落調査)と、「流入者調査」(定点調査地への流入者及びその母村を対象とした調査)および「派生地域調査」(主要流入者であった富山・高知のその他の移出先の調査)を実施する。調査の進行は、「事前調査」「本調査」「補足調査」の段階で深めていく。訪問先が複数にわたるため、調査地を5ブロック(A:但馬地方および鳥取、B:中部、C:四国、D:近畿(三重を含む)、E:九州)にわけ、一回の調査出張で2-3カ所の調査地を巡回できるようにする。調査データの整理については、インタビュー、契約文書、日誌、手紙、写真、区所蔵文書などの情報を個別に整理する。論点の明確化のため、調査地間の関係網の「地方別分析」(ブロック別及び中央日本と西日本の対比)と「木材消費分析」(伐採した木材の消費動向把握)を行う。成果の公表については、専門学会および関連する研究会において、発表および論文投稿を行う。

## 4. 研究成果

### (1) 平成29(2017)年度

平成29年度は、調査体制を整備した上で、Aブロック(兵庫県但馬地方)とCブロック(四国・高知県)で調査を行い、森林資源、小集落、林業出稼ぎ者に関する情報、資料を収集した。また、比較地域(西中国山地)とBブロック(中部・静岡)、Dブロック(近畿)でも、追加調査を行い関連資料を収集した。また、近代日本における林業移動統計に関する論文を執筆した。詳細は以下の通りである。

まず、調査関連機器や調査の前提となる資料、文献を購入し、また文献情報のデータベースを作成するなど調査体制を整備した。そのうえで、Aブロックの調査については、兵庫県北部香美町の中核集落の調査とともに、三つの小集落の調査を実施し、集落移転、林業出稼ぎの実態について情報、資料を収集した。Cブロックについては、高知県北部いの町で調査を実施し、出稼ぎ

の社会関係に関する実態を把握した。そこで得た情報をもとに、Dブロックの奈良県中南部川上村、三重県松阪市西部での人的移動についても調査を行った。Bブロックですでに得ていた情報をもとに、長野、静岡をまたぐ天竜川流域の林業と地域生活に関する文献資料も収集した。

林業移動の地域性を把握するために、Aブロックと類似した西中国山地における森林資源利用地域を特定し、該当自治体で調査を実施し、諸資料を収集した。近代以降における林業移動の全国的な傾向および歴史の変遷を把握するために、関連資料を収集検討し、論文執筆を行った。

#### (2) 平成30(2018)年度

30年度は、29年度までの調査成果を踏まえて、Aブロック(兵庫県但馬地方)とEブロック(九州)比較地域(西中国山地)で調査を行い、森林資源、小集落、林業出稼ぎ者に関する情報、資料を収集した。また、研究成果を学会、講演会で発表するとともに、学術雑誌に執筆した。

詳細は以下の通りである。当初予定していたCブロックの調査が豪雨の関係で実施できなかったため、他ブロックの調査を重点的に行った。Aブロックの調査については、兵庫県北部香美町の中核集落の調査とともに、これまで詳細を把握できなかった一小集落(小城)の調査を実施し、集落移転、林業出稼ぎの実態について情報、資料を収集した。特にN家の諸資料を所蔵している住民と協力しながら整理し、住民の地域意識と社会関係、生業および小集落の歴史的役割について分析を行った。Eブロックについては、宮崎県西米良村と大分県佐伯市で調査を行い、林業出稼ぎのルートを確認するとともに、西米良村の人口流入状況と地域社会の変遷について、具体的な聞き取り調査を行った。その他、宮崎県諸塚村と大分県日田市でも、林業と移動に関する情報、資料を収集した。比較地域については、これまでの調査の情報を提供すると同時に、今後の調査に必要な地域および関係者の情報を得た。研究成果については、日本村落研究学会中国地区研究会、大谷大学公開研究会で報告を行い、『ソシオロジ』に執筆した。

#### (3) 令和元(2019)年度

平成31(令和元)年度は、平成30年度までの調査成果を踏まえて、Aブロック(兵庫県但馬地方)とCブロック(四国)比較地域(西中国山地)で調査を行い、森林資源、小集落、林業出稼ぎ者に関する情報、資料を収集した。また、研究成果を学会や研究会で発表するとともに、学術雑誌に執筆した。

詳細は以下の通りである。Aブロックの調査については、兵庫県北部香美町の小集落(小城)の調査を実施し、集落移転、林業出稼ぎの実態について情報、資料を収集した。特にN家の諸資料を昨年に引き続き整理するとともに、移転先の祭礼に参加し関係者にインタビューを行った。Cブロックについては、高知県いの町吾北村で複数名の関係者に林業出稼ぎのルートと仕事の経験に関するインタビューを行った。また高知県立図書館にて、県内各市町村の林業および山村関連の資料を収集した。さらに高知と関わりの深い徳島の林業及び山村の状況について、徳島県立博物館および木屋平地区にて、資料および情報収集を行った。比較地域(島根、秋田)については、関係者にインタビューと現地視察を行い、調査資料や情報を得た。

資料の収集・整理については、人の移動に関する文献を収集し、文献リストを作成した。林業移動の特質を把握するために、漁業移動、都市移住、災害移動、移民等との共通点、相違点を検討した。

研究成果については、日本村落研究学会関西東海地区・中国四国地区合同研究会、日本村落研究学会全国大会で報告を行い、『社会学雑誌』に山村の社会学史に関する論文を執筆した。その他、神戸と東京の研究会にて、人の移動に関する学術情報の収集と意見交換を行った。

#### (4) 令和2(2020)年度

新型コロナウイルスの影響で予定していた調査が困難となったため、これまでの調査過程で重要だと判明した出稼ぎ受入地および排出地(北海道、秋田、宮崎、大分、和歌山、奈良、三重、岐阜、長野など)の資料を収集・整理し、諸事例の位置づけと研究の体系化を図った。また、可能な限り電話調査を実施するとともに、これまでの調査データを元に、書籍の刊行と論文投稿を行った。詳細は以下の通りである。

資料の収集・整理については、北海道の山林行政、林業労働に関する資料を収集し、道内の林業特性と労働移動について把握した。また北海道および樺太への主要労働供給地であった北東北、特に秋田県米代川流域についても資料および聞き取りの整理を行った。国有林を中心とした北日本型の林業移動に対して、民有林を基本とした九州型の林業移動に関しても資料整理を行い、宮崎県北部における木炭、木材市場の展開と労働移動の関連および大分県沿岸山間部からの林業移動の実態を把握した。中部型の林業移動については、御料林との関わりおよび三信遠地域の移動の実態を把握した。近畿型の林業移動については、空中滑走や筏の技術の普及と出稼ぎへの影響について検討した。以上の成果の一部については、『社会学評論』にて公表した。

また、主要調査地域(A・兵庫県)の地域的特質を把握する上で重要となる比較地域(西中国山地)について電話調査を行った。移住に関する調査データを元に、『日本の科学者』にてその成果を公表した。

人の移動や移住に関する研究史を整理するとともに、林業移動と集落移転などの諸事例の位置づけをおこない、それらに通底する社会的論理(人的関係網および「結びながら切る/切りな

がら結び」)を抽出した。その成果は、『年報村落社会研究』にて公表した。

#### (5) 令和3(2021)年度

令和3年度は、令和2年度までの調査成果を踏まえて、Aブロック(兵庫県但馬地方)と比較調査地(島根県益田市匹見町)で資料調査を行い、小集落、林業出稼ぎ者に関する情報、資料を収集した。また、研究史に関する研究成果を学術刊行物に執筆した。

詳細は以下の通りである。Aブロックの調査については、兵庫県北部香美町の小集落(小城)の調査を、電話と手紙にて実施し、集落移転の実態と木材伐採、集落財政の歴史の変遷について情報、資料を収集した。特にN家の諸資料を整理し、所蔵者と情報交換を行うとともに、あらたにN家に関する自伝的資料の提供を受けた。N家の土地の集積や共有地への関与、集落内外に対する広域的な人的ネットワークなど新たな事実が明らかになった。

比較調査地の島根県益田市匹見町の匹見下地区(匹見下公民館)にて、オンライン調査と対面調査を行い、小集落の現状と歴史および林業出稼ぎについて、情報と資料提供を受けた。匹見下地区は、町内でももっとも高齢化が進んだ地域だが、歴史的には林業や林野資源の上で重要な役割を果たした地域であり、それと連動して文化資源なども豊富に存在していることが明らかになった。

また、益田市匹見総合支所にて、役場職員、民俗研究者、地域組織代表者、神楽社中関係者等に地域資源に関する状況について対面調査を行った。さらに、研究の前提となる農村社会学の研究史について検討を行い、家村論の基礎、家連合論、共同労働、村落財政、土地論、移動論、地方論、歴史研究、調査論、現代的意義などについて考察を加えた。この点については、執筆を行い成果物の出版を行った。

#### (6) 令和4(2022)年度

令和4年度は、令和3年度までの調査成果を踏まえて、Aブロック(兵庫県但馬地方)と比較調査地(島根県益田市匹見町)で資料調査を行った。コロナ禍の影響があり、遠方での調査が依然として困難だったため、近隣の島根県益田市匹見町で詳細な調査を行うとともに、但馬地方と匹見町の間位置する安来市および広島県でも情報を収集し、中国山地の東・中央・西の特質と全国での中国山地の集落及び人的移動の地域性について検討を行った。

詳細は以下の通りである。兵庫県北部の小集落の調査を、手紙にて実施し、集落移転前の地域記録について情報、資料を収集した。比較調査地の島根県益田市匹見町のいくつかの小集落について、調査を行った。Y集落では、林業の業者が多く入り、神社祭祀や地域運営に影響を与えていたこと、また兵庫県豊岡市の業者との繋がりがあったことなどが明らかとなった。その他、匹見町直営造林の経験者や奈良県の先進林業地帯から移住、婚入した事例について情報収集を行った。中央中国山地の安来市近縁の調査では、赤屋地区の森林利用や小集落の消失について、情報収集を行った。広島の調査では、主として各市町村の林業の動向について資料収集を行った。また、一連の研究成果について、博物館での招待講演をおこない、調査方法のプロセスとそのあり方について日本村落研究学会において発表を行った。匹見町の事例については報告書も作成した。

コロナ禍の影響により、本調査、補足調査ができなかった調査地もあったが、高知県、宮崎県での林業移動のルートが判明したことにくわえ、比較調査地(島根県、秋田県)での情報収集や移転集落での所蔵史料の確保などにより、定点調査と流入者調査の軸となるデータを得ることができ、またその整理も進められた。論点の明確化と成果の公表についても、学会発表及び論文、刊行物の発刊により一定程度進めることができた。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 福田恵、長坂格	4. 巻 55 (10)
2. 論文標題 山間地域における移住者の社会的役割—その継承と生成に着目して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本の科学者	6. 最初と最後の頁 17-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 福田恵	4. 巻 71 (4)
2. 論文標題 近代山村にみる広狭域のネットワーク構造—森林資源をめぐる動員網と関係網	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 社会学評論	6. 最初と最後の頁 595-614
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4057/jsr.71.595	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 福田恵	4. 巻 35
2. 論文標題 近代山村の社会学史的研究 社会結合と森林形成に関する論点と課題	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 社会学雑誌	6. 最初と最後の頁 96-127
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24546/E0041984	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 福田恵	4. 巻 63-2
2. 論文標題 「山」からみる社会学	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ソシオロジ	6. 最初と最後の頁 119-126
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14959/soshioroji.63.2_119	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 福田恵	4. 巻 15
2. 論文標題 近代日本における森林資源の確保と林業移動	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 社会文化論集	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15027/46393	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 福田恵	4. 巻 2
2. 論文標題 匹見調査実習の目的と概要	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『現代山村における地域資源の住民利用に関する調査研究』	6. 最初と最後の頁 1-4
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 福田恵	4. 巻 28 (2)
2. 論文標題 中国山地の狭く広い世界 小集落・動物・写真を手がかりとして	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 村落社会研究ジャーナル	6. 最初と最後の頁 26-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.9747/jars.28.2_26	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 福田恵
2. 発表標題 シンポジウム「家族と地域社会の持続可能性」へのコメント
3. 学会等名 日本社会分析学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 福田恵
2. 発表標題 『資源』を介した人の移動と村落研究の可能性 出稼ぎ・集落移転・農村移住の諸事例から
3. 学会等名 日本村落研究学会関西東海地区・中国四国地区合同研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 福田恵
2. 発表標題 人の『移動』からみた農山漁村 村落研究の新たな地平を目指して
3. 学会等名 日本村落研究学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 福田恵
2. 発表標題 趣旨説明『地方的世界』調査と豊岡市外国人住民調査（モビリティと地方的世界の変容 豊岡市外国人住民に関する調査から）
3. 学会等名 関西学院大学先端社会研究所シンポジウム
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 福田恵
2. 発表標題 事業所における外国人従業員
3. 学会等名 兵庫県豊岡市の外国人住民に関する調査研究最終報告会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 福田恵
2. 発表標題 戦後山村における林業移動と小集落の役割 高知県吾北村の林業グループを中心として
3. 学会等名 日本村落研究学会中四国研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 福田恵
2. 発表標題 山間地域の過去・現在・未来 「集落」の消失と生成から考える
3. 学会等名 大谷大学公開研究会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 福田恵
2. 発表標題 「故郷」の社会学 山と鉄と村から考える
3. 学会等名 和鋼博物館 2022年度公開講座（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 福田恵
2. 発表標題 農村調査方法の論点と課題 2つの調査経験から
3. 学会等名 日本村落研究学会
4. 発表年 2022年



〔図書〕 計2件

1. 著者名 福田恵	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 232
3. 書名 「『家・村』論のあゆみと現在」山本努編『よくわかる地域社会学』	

1. 著者名 福田恵編（日本村落研究学会企画）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 農山漁村文化協会	5. 総ページ数 368
3. 書名 人の移動からみた農山漁村 村落研究の新たな地平（年報村落社会研究56）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------